

平成22(2010)年度「NGO長期スタディ・プログラム」最終報告書記載項目

提出日：2011年3月11日

氏名：原 梓

所属団体：アジアの女性と子どもネットワーク

受入先機関名(所在国)：The Mirror Foundation (タイ)

研修期間(全体)：2010年9月20日～2011年3月10日

研修テーマ： タイ北部山岳地帯の人身売買予防啓発プロジェクトの再構築、
及び山岳少数民族の性教育ピアエドゥケーターの養成プログラムの策定

全体研修目標：

- 1、 北部山岳地帯における、人身売買被害の状況と傾向に関する調査をとおして、チームビルディングの方策、評価方法などを身につける。
- 2、 調査に基づいた新たな行動計画の策定方法、協力体制の策定、スタッフの能力開発等を学ぶ。
- 3、 タイ国内における人身売買防止ネットワークへのコネクションをつくる 所属団体へ還元する
- 4、 性教育ピアエドゥケーター養成事業の運営方法を学び、身につける。
- 5、 応募団体と受入れ団体との継続的な協力体制を作り、今後に繋げる。

具体的な研修内容：

- 1、 人身売買被害の調査
- 2、 将来実施可能な行動計画の策定
- 3、 タイ国内でのコネクション作り
- 4、 性教育の実施方法を学ぶ

研修の成果：

(目標に対し達成できなかった内容がある場合は、その理由とあわせて報告してください)

1、 人身売買被害の調査

ミラー財団のスタッフと共に、多くの山地民(主にアカ・ラフ・カレン)の村を訪問することができた。アンケートに答えてもらうというような形の調査も全く行わなかったわけではないが、主にインタビューを中心とする質的調査を実施。このような調査を改めて行った背景に、過去にミラー財団で実施してきた過去の人身売買防止キャンペーンはどの程度山地民を人身売買のリスクから遠ざけることができたのか、という事業の事後評価も兼ねている。結果的には、キャンペーン実施前と後で大きな意識の変化は見られないということが分かった。但しこれは、キャンペーンが無意味だったわけではなく、村人の理解を深めることには繋がっているし必要なことではある。

ただ、ミラー財団周辺地域の山地民の多くが、人身売買ブローカーの手口（いい工場の仕事があるからバンコクへ行かないかなど）をすでに心得ており、「何もわからずにたどり着いたら性的サービスを強要されるマッサージパーラーだった」というような被害はほとんどなく、ある意味では「自ら」性産業に足を踏み入れ、結果的には想像以上の搾取に遭うという被害の方が可能性としては大きいことが分かった。

過去のキャンペーンでは、「子どもの権利」「児童労働」「（被害に遭った時）助けを求める方法」を劇や自作映画、パワーポイントを使ったプレゼンテーションによって周知するという方法が採られていた。小学校卒業程度の学歴の山地民が多く、タイ語があまり通じないところではそれぞれの民族の言葉で行われる劇や映画などが非常に人気であった。内容もわかりやすく、娯楽性もあることから気楽に参加できるのは今後も活用できる点である。しかし、厳しいことを言うなら、内容が「ありきたり」で、すでに大部分の村人が理解している内容である。

インタビューで売春をする動機に関して話が及ぶことが度々あったが、数人の村人（本人は売買春には関わっていない）からの意見として「畑仕事は辛くて利益が少ししかない。体を売った方が効率よく稼げる。」といった話があった。これはもちろん一部の意見にすぎないが、このような動機で性産業に足を踏み入れる女性は少なからずおり、場合によっては村の産業として南部や中部タイに女性を送り込んでいる所もあることがわかった。そのような場合、共通しているのが高等教育や職業訓練を受けていないことが挙げられる。大体が小学校卒業程度で、場合によっては国籍を有していないケースもあり、職業選択が著しく制限されている。

そして、もう一つ共通点として「母子家庭」であるケースが多い。ティーンエイジャーで妊娠・結婚をしたものの夫の浮気等で離婚し、効率よく子どもを養う方法の一つとして性産業に足を踏み入れる女性もいる（この点は家族計画や性教育といった問題ともリンクしている）。

経済状況は家庭によって大きく異なる。新しい家を建てたい、車が欲しいといったものから、両親の医療費を賄うため（国籍がなければ医療費は全額負担）などというケースもあることなどがわかった。

多くの山地民と出会い、話をすることができた。彼ら/彼女らの生の声を聞くことができた非常に貴重な経験だった。1人1人にそれぞれの想いがあり、生活がある。当たり前のようなのだが、こういったことを肌で感じ、実際に経験出来たことは大きな財産である。

2、将来実施可能な行動計画の策定

調査から、過去に行われてきた予防啓発キャンペーンは、全く意味がないわけではないが実際の説得力には欠けるということがわかった。

人身売買の防止に必要なことは、現行法の周知や権利に対して理解を深めることと言うのは当然であるが、インタビューなどを通して私が感じたのはそういったキャンペーン（「人身売買防止」として直接イメージできる、法律や権利に関する理解を深めるもの）よりも、識字率の向上や基礎教育の徹底、高等教育への進学率の向上、職業訓練などの方がはるかに人身売買の防止に有効であるということである。法律の知識を持つことは、自分の身を守ることに繋がるが、いくら法律を知っていても、違法だということがわかっていても、職がなければ性産業や麻薬売買と言った危険な仕事に従事するリスクが増えるからである。遠回りな方法ではあるが、結局地道にやっていくしか道はないように思う。

キャンペーンでは従来の内容に加えて、おとなを対象とするときは高等教育を受けることの具体的なメリットを示し、子どもたちには世の中には色々な職業があるということを示す必要があ

る。調査でとても驚いたことが、「将来の夢」を描き発表することをしたのだが、ある学校では皆揃って「先生」の絵を描いた。しかし、よくよく聞いてみると将来の夢はお医者さんや警察官だった。その学校の先生曰く、子どもたちの中にはお医者さんを見たことがない子がいる（その地域は看護師のいる保健所しかない）からわからないのだと思うと話していた。このように、一部の地域では情報が想像以上に限られている為に、人身売買被害のリスクが高い。

3、タイ国内でのコネクション作り

数回にわたるチェンマイでの視察や、会議への参加によってタイ国内の多くのNGOワーカーと知り合う機会を持つことができた。ミラー財団はタイ国内では規模の大きいNGOであるが、スタッフが2, 3人で運営しているような小さなNGOワーカーと一緒にイベントに参加する機会もあり、開発やNGOの在り方に関して議論をしたが、経営・運営に関しても非常に興味深い部分があった。

4、性教育の実施方法を学ぶ

事前にミラー財団のあるチェンライ県ムアン郡メエヤオ地区の中学校3校と、この地域の子どもが多く通う私立の中学校に対して性教育の実施に関する調査を行ったが、実際にコンドームを使用して積極的な性教育を行っている学校は1校のみで、他は「口頭で説明」「パンフレット配布」、ある中学では全く性教育を行っていないということがわかった。子どもたちの中には、避妊や性感染症のみならず女性器・男性器に関しても全く理解していない子どももいることが分かった。

タイではNGOを中心に日本よりもずっと積極的な性教育が行われているが、性教育に限らず教育が不足している地域ではかなり理解に差があることが分かった。

積極的な性教育を行っている中学校では、先生が何度も保健省の主催するワークショップに参加し、正確な知識を身につけている。

研修中、数回にわたってミラー財団の奨学生たちに性教育のワークショップを行う機会を得ることができた。ワークショップを通じて学んだことは、アイスブレイキングが非常に重要だということである。ミラー財団の奨学生ということで、ある程度顔見知りになった上でのワークショップであったが、最初から積極的に参加する・活発に質問が出るということは少なく、多くの場合がワークショップの終了後に個別に呼びとめられて相談を受けるようなことが多かった。

これが全くの初対面だったということ想定すると、しっかりアイスブレイキングをしなければ踏み込んだ話をするのは難しいと感じたし、出来れば数回にわたる連続講座にして、ある程度の信頼関係を築いてから話を進めた方が良いと思う。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法：

1、人身売買被害の調査及び、将来実施可能な行動計画の策定の活用

アジアの女性と子どもネットワークは設立時から「子どもの商業的性的搾取に反対する活動」に力を入れて活動してきた。直接的に、人身売買や子ども買春などの防止キャンペーンに参加することもあるが、海外事業では教育支援を中心に取り組んでいる団体である。

今回の調査を通して、教育がいかに重要で、結果的に人身売買を防止する抑止力になるかを実感することができた。生きる糧がなければ、リスクのある仕事を選ぶしかない。遠回りなことではあるが、人身売買の問題自体は非常に根が深く、長い年月問題になっていることなので、今すぐに結果を求めず、過去に行ったタイ国内の教育支援事業の見直しなどを丁寧に行うことが大切だと感じた。

併せて、今後タイの子どもや女性の権利向上のためのキャンペーンやワークショップには積極的に関わることで、タイの団体と更なる交流ができると思う。タイのNGOはとても活発で、市民を引き付けるスキルを持っているので、それを日本国内の人身売買を含む、商業的性的搾取に反対する活動に活かしていきたい。

2、タイ国内でのコネクションを活かす

タイ国内で行われる会議に参加したが、1月末に行われた「ストリートチルドレンや教育機会に恵まれない子どもたちのためのノンフォーマルエディケーション教育」に関する会議ではチェンライ県を中心とする北部タイの教育関係者やNGO、警察や公務員が集まって、より効果的な教育方法に関して議論がなされた。その際に東北タイ・ウドンタニー県とコンケン県でノンフォーマルエディケーション教育の先生をしている方が識字教育に関して非常に興味深い発表を行った。

アジアの女性と子どもネットワークでは次年度以降にタイの山地民に対して教育支援の一環として識字教育をするという計画もあるので、すでに識字教育をタイ国内で実施している先生方の発表は非常に参考になった。会議の終了後にも個別に相談をする機会にも恵まれ、いくつかのアクティビティを紹介してもらうことができた。これらのアクティビティは、アジアの女性と子どもネットワークが毎年スタディツアーで訪問する支援先（山地民の通う学校や孤児院）でも応用可能なものである。連絡先も交換したので、今後もコンタクトをとって協力関係を築くことが可能だ。

このように、会議で知り合った他のNGOの中には性教育を得意としたところ、人身売買防止の活動にノウハウを持っているところもあり、将来的にアジアの女性と子どもネットワークと協同事業が可能なNGOが多くあり、スタディツアーなどの機会に訪問するのも良いのではないかと思う。

3、性教育の実施方法

研修中にはバレンタインデーのイベントや、毎週土曜日に歩行者天国で行われるティーンエイジャーを集めたイベントに参加する機会が多くあり、そこで知り合った他のNGOや政府機関のスタッフから、それぞれの団体が行っている性教育の実施方法に関して意見交換をすることもできた。

これは、「町の子どもをいかに引き付けるか」という課題を解決する手掛かりになった。なぜなら、ミラー財団が対象としている子どもたちというのは町からある程度離れており、場合によっては家にテレビがない、コンピューターもない、携帯電話も圏外という、比較的「娯楽や誘惑」から離れて生活している子どもたちが多いため、ワークキャンプなどにも積極的に参加する傾向にあるが、町の子どもたち（ショッピングセンターやゲームセンターが近くにある、携帯電話やコンピューターを持っていてインターネットに簡単にアクセスできる）を、いかにワークショップに参加してもらうかという「きっかけ」作りが課題だったのだが、いくつかのイベントに参加したことで、その方法（例えば併せてライブを行う、ファッションショーやコスプレショーを行う、有名人を呼ぶ、軽食を無料で配布するなど）を学ぶことができた。アジアの女性と子どもネットワークは横浜にあるので、都市部の子どもをイベントに参加してもらうためのノウハウは不可欠である。

教材に関しても、出来るだけ興味を持ってもらえるようなデザインにすることが重要である。いかにも教科書的なテキストでは興味を示す子どもは少ない。そして、できるだけ作成時に子どもの意見を取り入れることも重要だと感じた。特にケーススタディは、実際に友人・知人に起きた話を基にストーリーを作ることでリアリティが増す。このような過程を子どもと一緒に行うことで、ピアエデュケーター養成の一環にすることができる。子どもたちに対して講義を行い、インプットさせるだけで

なく、子どもたちがアウトプットできる機会を設けることは、自信とさらなる理解につながるということが分かった。

4、全体を通して感じたこと

純粹で素朴な暮らしをする山の民、というのは私たちのイメージで、実際には昼間からお酒を飲んで暴れている人もいれば、金髪の髪をなびかせている若者たちも沢山いた。伝統的な暮らしをする人もいればそうでない人もいる。必要以上に「山地民（山岳民族）」としてのステレオタイプなイメージを先行させると本来見なくてはいけないものが見えなくなる。

この研修期間、私が最も違和感を感じ、非常に残念なことだと思ったことがある。私はミラー財団の奨学金部門でも同時に研修を行っていたのだが、村に入ると必ず「うちの子にも奨学金をください。うちは本当に貧しくて大変だ」「子どもが中学に入るのだけれど、養えないから寮を紹介してほしい」このような相談を受けた。

中には本当に生活が大変で、子どもの交通費を月々捻出するもの苦勞している家庭もあるが、それは一握りで、ほとんどは自分たちで解決できることを自分たちで解決しようとせず、人に頼ろうとする。これは奨学金プロジェクトに限ったことではない。そして中には「誇らしげに」私の家は貧しいので奨学金をくださいという子どももいた。

北タイでは20年くらい前からすでに山地民の子どもを受け入れる寮があった。遠方で家からは学校に通えないという家庭も多いのだが、貧困や両親の麻薬問題等で家庭を離れる子どもも多い。

この研修期間中、山地民の国籍問題や定住化政策（山の国有林化）など様々な問題を目の当たりにしてきて彼らの苦しい部分も見えてきたが、それでもやはり現在の「援助ありき」という生活スタイルには違和感を覚えずにはいられなかった。

このようになってしまったのは、長年に渡って援助漬けにされた結果だと思う。ミラー財団だけがそうしているという意味ではなく、タイ人特有の「徳を積む」という考えに由来する個人や団体からの寄付、政府から寄付が、本当に必要としている人以外にも多く渡っているということ、海外からも多くの援助が来ていること、そしてそれらの寄付を得るためには、いかに自分たちが貧しいか、困難な状況にあるのかということのアピールすることが必要だと長年の暮らしから学んだのだろう。

アジアの女性と子どもネットワークも、タイ国内で様々な活動をしてきた。私は、アジアの女性と子どもネットワークが行ってきた活動は山地民の自立を促すものだとして理解しているが、今一度事業を見直し、今後のタイでの活動に対して再考する必要があると強く感じている。そういった意味でも今回の研修は非常に刺激的なものであった。

以上